外国人による日本論
進化論的イデオロギーとその破産

丹治　陽子

第１部　エキゾティシズムと進化論

はじめに

外国人による日本論あるいは日本人論で、現在われわれが容易に手に入れられるものというと、古いところではフランシスコ・ザヴィエルやシーボルトの著作があげられる。しかし本論では、近代国家として成長する日本が世界からどのようなまなざしを向けられ、どのようなイメージをあたえられていたかということを明らかにするために、幕末の開国以前から第2次世界大戦後にいたる時期に書かれた日本論に議論を限定する。

日本が開国か攘夷かに揺れていた幕末以降、外交官、商人、宣教師、教師などからなる多くの外国人が日本を訪れ、それぞれの立場から日本についての文章を残した。それらの文章は、時代ごとにたどってみるならば、時代とともに確実に変容する日本のイメージを伝えている。

その日本イメージの変容は、日本が開国以降、殖産興業によってしだいに国力を整え、富国強兵によって軍事力を増強し、日清、日露、第一次大戦、第二次大戦をへて、国際関係のなかの立場を急激に変えていったという歴史的事実を反映するものであったのは当然のことだが、しかしそれだけで説明がつくものでもない。日本論を書く側のイデオロギー（世界観・歴史観）もまた変化していたことが、そこにからんでくるからである。そしてそのようなイデオロギーのひとつに、進化論的イデオロギーがあった。

本論の基本的主題は、幕末から第二次大戦あたりにかけて書かれた外国人による日本論をあつかいながら、日本論における日本イメージがどのように変容していったかを時代ごとにたどり、そのうえでその変容の要因として、日本論を書く側のイデオロギーのなかにどのような歴史的な変化が認められるかを、進化論を中心にして見てみようというところにある。

佐伯氏による日本論の３区分

佐伯彰一氏は『アメリカ人の日本論』において、大隈重信が『欧米人之日本観』（1908）に寄せた文章のなかで、日露戦争直後までの外国人の日本観が3期に区分されると述べていることに触れ、それにさらに肉づけをするかたちで、開国から第一次大戦前夜までのアメリカ人による日本論を、おおざっぱに3つの時期に分類している（佐伯9-16）。まずはその区分にそってそれぞれの時期の特徴をながめてみよう。

それによると、第1期は「ペリー艦隊の来航から、明治維新前後にかけて」（1853年から1868年あたりにかけて）、第2期は「明治10年代から日清戦争頃にかけて」（1877年から1894年あたりにかけて）、第3期は「日露戦争後」から第一次大戦にかけて（1904年から1914-18年あたりにかけて）ということになる。

まず第1期の、「ペリー艦隊の来航から、明治維新前後にかけて」を見てみよう。この時期には開国準備や開国後の駐在のために来日した「軍人、外交官、宗教家、商人」、また「いち早く、いわゆるお雇い外国人として、教師また明治政府の顧問をつとめたアメリカ人」が残した記録がある。たとえば、ペリーの『日本遠征記』(1856)、1856年から62年にかけて日本に滞在したタウンゼント・ハリスの『日記』、1859年から92年にかけて日本に滞在した、ヘボン式ローマ字で有名な宣教師ヘボン(ヘップバーン)の書簡、1870年に来日し福井藩藩校や東大の前身である南校で理科を教えたグリフィスの『皇国』(1876)などである。

第2期は、「明治10年代から日清戦争頃にかけて」である。このころの日本論の特徴は、「風変わりな東洋の島国帝国というエキゾティシズム」であると佐伯氏は述べている。この期に日本について書いたアメリカ人として、佐伯氏は、ダーウィンの進化論の日本への紹介者として、また、大森貝塚の発見者としても有名な動物学者エドワード・モース(日本滞在は1877年から79年、および1882年から83年)、天文学者パーシヴァル・ローウェル(日本滞在は1877年から93年)、ラフカディオ・ハーン(1890年来日。1904年の死まで日本に滞在)、日本美術の紹介者フェノロサ(日本滞在は1878年から90年、および1896年から1901年)、歴史家・思想家ヘンリー・アダムズ(1886年来日)などをあげている。

彼らのうちローウェルとハーンの来日は、「何よりも異国的なもの、西欧離れのしたものを求めての旅」だった。また、フェノロサが「日本美術、東洋美術に心ひかれ、憑かれた」のも、「異国的なもの、異質的なものの魅惑」のためだった。そう指摘することにより、佐伯氏は、そのようなところにこの時期の日本論の特徴であるエキゾティシムズが端的にあらわれていると述べている(佐伯12-13)。

日本論の第3期は「日露戦争後」であり、それを代表するのは、それぞれ日露戦争終結の年(1905)に公刊された、ラフカディオ・ハーンの『神国日本』と、アメリカ人宣教師として1888年から1913年まで日本に滞在したシドニー・L・ギューリックの『日本人の進化』である(ただし、『神国日本』も『日本人の進化』も、実際には1905年の公刊ではなく、それぞれ1904年と1903年で、厳密には日露戦争後とは言えない)。

『神国日本』が「組織的、総体的な日本認識の試みであり、そこで光っているのは、むしろリアリストの眼であった」ように、「この時期における日本論の特徴は、客体化にあるといえるだろう。一個の独立した客体として、これをとらえ、解釈しようという指向が、書き手の立場、観点、また偏見のいかんを問わず、はっきりと認められる。日本が外国人の眼にみずからをさらしはじめてから約半世紀、その国際政治的、軍事的、また文化的な特質が、ようやく一個の有機的な個性としてとらえられるようになった」(佐伯 14)。

この3期以後の日本論は、佐伯氏によれば、「[第一次世界]大戦中から以後にかけて」という大戦間期にはいっていくが、この時期は「[日米]双方の側で、警戒心、仮想敵意識ばかりがいたずらに高まって、冷静沈着な対象認識は、いっこうに深められることなしに終わ」った結果、「1920年代から太平洋戦争直前にかけてのほぼ20年間に[中略]注目すべき日本論は[中略]書かれ[ることは]なかった」という。したがって、日本論の白眉、文化人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』(1944)は、この時期の著作というよりは、むしろ「『最も気心の知れない敵』を何とか理解しようという差し迫った戦時下の必要の生み出したものだった」のである(佐伯 16)。

エキゾティシズムと進化論

以上のような佐伯氏による日本論の歴史的区分には、かならずしも明示されているわけではないが、第1期から第3期にむかって、だいたいつぎのふたつの方向性が認められるだろう。ひとつは、(1) 断片的記述から総合的記述へ、そしてもうひとつは、(2) エキゾティシズムからリアリズムへ、という方向性である。

まずは(1) の方向性だが、第3期の日本論が「ようやく［日本を］一個の有機的な個性としてとらえるようになり」、「組織的、総体的な日本認識」を生み出しつつあったと書いてある以上、その前提として、それ以前のものは多かれ少なかれ断片的な日本理解に終始していたということになるだろう。第3期以前の日本論は、日本を全体的に分析するのではなく、たんなる断片的な印象としてながめていたということになるだろう。しかしはたしてそうだったのか。

また、(2) の方向性は、第2期の日本論がエキゾティシズムによって特徴づけられると述べられているのにたいして、第3期の日本論には「リアリストの眼」が感じられると書いてあるあたりに認められる。第2期と第3期にまたがるラフカディオ・ハーンを典型的な例として、日本にたいするまなざしは、異質なものへの憧れをふくむエキゾティシズムから、ありのままの日本をとらえるリアリズムの方向へ移行していると想定されている。しかしそれもはたしてそうだったのか。

たしかに全体的な傾向としてはそうかもしれない。しかしあらゆる歴史区分というものが当然のことながら例外をふくむように、以上のような日本論の歴史的展開の要約も、さまざまな問題をふくんでいると見るべきだろう。

たとえば第2期を見てみよう。エキゾティシズムによって特徴づけられると述べられている時代である。そのことを論じるためには必須の文献であるパーシヴァル・ローウェルの『極東の魂』はあとで詳しくながめることにして、ここではこの時代の日本を見るまなざしがたんにエキゾティシズムだけでなかったことを確認しておきたい。

たしかにこの時代には、美術においてジャポニスムが流行し、日本の異国情緒が多くの西洋人を魅了していた。日本の美術は、17世紀半ばから輸出されていた「古伊万里」「色鍋島」「柿右衛門」などの磁器や漆器によりすでに西欧に知られてはいたし、1865年頃に木版による精巧な多色刷りの錦絵が開発されてからは浮世絵が一部の西欧人の関心を引き、ジャポニスムと深い関わりをもつようになる。しかし、日本の異国情緒が一般の人びとに広まるのは1867年のパリ万博によってであり、ジャポニスムの熱狂がフランスで頂点に達したのは、1876年のパリ万博のときであった。それは「もはや流行ではなく、熱狂であり、狂気で」あった（三浦 29)。

図1は1876年にモネが発表した『ラ・ジャポネーズ』という絵である。これは女性が羽織った日本の着物、竜を退治する武士が真っ赤な布地に刺繍されている着物を描くことが主題となっている絵であるが、女性が手にした扇子、壁に飾られた団扇、畳を思わせる床など、すべて日本的なものを描いた日本趣味の絵である。それにたいして図2は、『パンチ』の1893年3月号に「ひとつ欠けているもの、それは世紀末の日本人の女性の権利だ」というキャプションとともに載せられた風刺画で、明らかに図1のモネの絵のパロディである。この女性が扇子を手にして立つポーズはそのままモネの絵と重なるし、着物の柄は、モネの女性が着ている着物の上部と同じく、花咲く木の枝と小鳥である。

図1

One thing is wanting —Women's Rights,
O *fin de siècle* Japanese!

図2

たしかにこのような風刺画の存在は、日本にたいする異国情緒的関心がいかに一般の人びとのあいだで高かったかを示す証拠となるだろう。

他方、ラフカディオ・ハーンの日本への憧れは、ジャポニスムの流れとは離れた個人的なものであった。ハーンはアイルランド人の父とギリシア人の母のあいだに生まれたが、アイルランドの土地になじめなかった母親は、幼いハーンをアイルランドにおいてギリシアに帰ってしまう。以後ハーンは母親の面影を慕い、ギリシア神話の神々の国への憧れを抱いて暮らしていたが、そのギリシアへの憧れが、八百万の神々の国、神秘的な東洋の国日本に投影され、自然と調和した当時の日本人の生活への共感となっていったのである。その意味でハーンの日本への憧れもまた、異国情緒的な日本のイメージに触発されたものであった。

しかしこの第2期というのが、1877年から1904年にかけての時代であったことを想起するならば、日本に向けられていたまなざしがたんにエキゾティシズムのそれだったとは信じられないだろう。それは、1877年に来日したエドワード・モースが日本に進化論を紹介した時代、つまり、ダーウィンの『種の起源』(1859) が刊行されて18年がたち、さまざまな宗教的反発に出会いながらも、進化論が西洋の支配的なイデオロギーになりおおせていた時代であった。

図3の絵を見てみよう。この絵は明治20年刊の時局風刺漫画雑誌『トバエ』にのったフランス人ビゴーによる風刺画である (清水 47)。洋装をした日本人とおぼしき男女が、鏡で自分たちの姿を見ている。この絵の風刺の対象は、言うまでもなく、鹿鳴館を舞台に展開した日本の皮相的な欧化政策である。

図3

外務卿井上馨は、1883年に落成した鹿鳴館で洋装をした日本人が西洋人との舞踏会を毎晩のように行うことにより、対等な外交ができる文明国日本というイメージを西洋にうえつけ、幕末の不平等条約を改正するための一助にしようとしていた。しかし西洋人の目に映る日本人の姿は図3のようなものでしかなかったのだ。そのまなざしは、日本人を進化論的に劣った存在としてながめるものだった。

男はシルクハットをもつ手を得意そうに腰に当てているが、出っ張った口元、出っ歯、猿のような額の傾斜は、当時の西洋人が日本人を描くときのステレオタイプであるとともに、日本人が西洋人より進化が遅れた東洋の人種であることを暗示している。もっとはっきり言ってしまえば、鏡に人間ではなく猿とおぼしい動物の顔が映っていることからわかるように、それは、まさに猿としての日本人イメージを表象していたのだ。

進化論的尺度のなかでより低い位置を占める猿としての日本人イメージは、ピエール・ロチの『秋の日本』のなかにも見いだせる。江戸の舞踏会で燕尾服を着た日本人について、彼はつぎのように書いている。

> それにまた、燕尾服というものは、すでにわれわれにとってもあんなに醜悪であるのに、何と彼らは奇妙な恰好にそれを着ていることだろう！［中略］どうしてそうなのかはいえないけれど、わたしには彼らがみな、いつも、何だか猿によく似ているように思える（ロチ 61）

このように、この第2期の日本論は、少なくとも2種類のまなざしによって特徴づけられなければならないはずである。くりかえすならば、ひとつは、神秘的な魅力をたたえた東洋の国というエキゾティシズムのまなざしであり、もうひとつは、当時の支配的なイデオロギーとしての進化論の影響のもとで、日本を進化の遅れた人種の住む極東の地としてながめるまなざしである。これについてはのちにローウェルをあつかうときにもう一度論じることになる。

リアリスティックで総合的な理解

佐伯氏は、日本論の第3期になって、はじめてリアリスティックで総合的な日本理解が生まれてきたと暗示している。それまではそういうものがなかったのだろうか。全体的な傾向をいう場合には、これは正しいかもしれないが、しかしたとえば第1期にすら、日本をリアリスティックに、かつ総合的にとらえるまなざしがなかった、と一概には言えないのではないだろうか。

佐伯氏は議論の対象を「アメリカ人の日本論」に限定しているが、同じ時期に日本論を書いているアメリカ人以外の日本論としては、イギリス人外交官として1859年に来日したラザフォード・オールコックによる『大君の都』（1863）がある。たとえばこの日本論の目的だが、オールコック自身は以下のように書いている。

第一の目的は、不思議な縁でいっしょに暮らすことになった風変わりな国民について注意深く研究した結果を報告し、そうすることによって、できることなら、個人的な観察と種々の素材にもとづいて、われわれの知識の大いにかけている面をおぎなうことである。第二の目的は、東洋の性格ならびに東洋の政策に対応する全西洋の外交の状態について、たとえいかにかすかであり、断片的であるにせよ、何らかの光を投げかけることである。(オールコック［上］25)

すなわち、この時期に書かれた日本論は、それまでに書かれた「この世ながらのお伽の国」(［サトウ 13］サトウもイギリス人外交官として1862年に来日。ただし、『一外交官の見た明治維新』は1921年の刊行）という夢のような日本のイメージ、東洋のパラダイスというイメージからいったん離れ、交渉相手としての現実の日本ないし日本人を理解しようという真摯でリアリスティックな動機をまちがいなく秘めていた。

ただし、その記述は、たしかにオールコック自身が認めるように、「断片的」であったかもしれない。たとえば彼は、奇妙な風習をもつ極東の小国という日本イメージを、ただ「断片的」な描写によってのみつみあげているかにみえる。

たとえば日本の女性のお歯黒の習慣については、「歯に黒いニスのようなものを塗りなおして眉毛をすっかりむしり取ってしまったときには、日本の婦人はたしかにあらゆる女性のうちで、人工的な醜さの点で比類のないほどぬきんでている［中略］。このように醜くされた彼女たちの口は、まるで口を開けた墓穴のよう」であり、「こういう赤く塗ったくちびるで、夫や愛児にたいしてこれほどの人工的な醜さを補うに足ることをいえる」(オールコック［上］291）とは信じがたいが、「女が貞節であるためには、これほど恐ろしく醜い化粧をすることが必要だ」ということなのだろうか、と思いつくまま漫然と印象なり感想を書き連ねているだけに見える（オールコック［上］294)。

また、日本人の入れ墨については、「日本人がたとえ野蛮人ではないにしても、戦争化粧をする野蛮人にとてもよく似ていることは、否定しがたい」(オールコック［上］290）と、これまた漫然とした比較に走っている。そして『種の起源』のほんの4年後に公刊されている『大君の都』は、時代的にはおそらく進化論の影響をこうむっているとはいえないが、それにもかかわらず、東洋を文明的に西洋より劣った地域と見なす抜きがたいオリエンタリズムに侵されているかに見える。その意味で、第2期の日本論に見られる、進化論的な立場からの日本・日本人蔑視の先駆と見えなくもない。

しかし入れ墨について彼は、じつは以下のようにも言っているのだ。野蛮人のような入れ墨をしていても、「日本人が他の土地の上品な人たちのように着飾るとすっかり変わった人間」になり、「その仕草と表情には、穏やかさと人の心をとらえずにはおかぬ丁重さがあらわれて」おり、「生活上の礼儀を完全に理解している」(オールコック［上］297-98)。オリエンタリズム的なステレオタイプを脱却して、それとは異なるものを探りあてる「リアリストの眼」をここに認めることも可能なのではないだろうか。

そしてオールコックは、日本および日本人について、あるいは日本人の文明のレベルについて、つぎのような総合的な分析もおこなっている。

彼らの文明は高度の物質文明であり、すべての産業技術は蒸気の力や機械の助けによらずに到達することができる限りの完成度を見せている。ほとんど無限に得られる安価な労働力と原料が、蒸気の力や機械をおぎなう多くの利点を与えているように思われる。他方、彼らの知的か

つ道徳的な業績は、過去三世紀にわたって西洋の文明国において達成されたものと比べてみるならば、非常に低い位置におかなければならない。これに反して、彼らがこれまでに到達したものよりも高度な、そして選りすぐれた文明を受け入れる能力は、中国人を含む他のいかなる東洋の国民の能力よりもはるかに大きいものと私は考える。(オールコック［上］201)

日本の文明を、産業革命以前の段階としては最高度の完成度をそなえた「高度の物質文明」だとしつつ、しかし「知的かつ道徳的な業績」については西洋よりもはるかに劣っていると断定する、と同時に、「文明を受け入れる能力」という今後の可能性については、「いかなる東洋の国民の能力よりもはるかに大きい」と認める――このあたりの複眼的な日本へのまなざしは、いかにも有能な外交官らしいまなざしと言ってしまえばそれまでかもしれないが、第3期にも十分通用する「組織的、総体的な日本認識の試み」と、はたして言えないだろうか。

JAP THE GIANT-KILLER.

THE JAP IN THE CHINA SHOP.

図5

オールコックの日本論がいかに「リアリストの眼」によって「総体的に」観察されたものであったかは、それがその後の日本が実際にたどった道を正確に予見していたことによって証明されていると思わずにはいられない。彼の時代に東洋の小さな新興国家にすぎなかった日本は、他の東洋の国家をしのいで、しだいに世界の列強となっていく。

日清戦争（1894-95）のときには、中国は東洋の大国、日本は小さな国家と考えられていた。図4は日清戦争での日本の勝利を描いた『パンチ』の挿絵（1894年9月29日号）だが、日本はサムライの鎧をつけ刀を振りかざす小人である一方、中国は巨人として描かれている。図5でも、日本人は刀ではなく銃をもち、軍服らしきもの（上半身は着物をたくしあげたもの）を着ているが、以前よりは大きくなったとはいえまだ中国人より小さく描かれている。

ところが、この東洋の小国が大国ロシアと戦った日露戦争（1904-05）のときには、「『パンチ』は、日露戦争中、基本的に一貫して日本とロシアを同じ大きさで表現している」（湯本 130）のである（図6, 図7参照）。もちろんそれは、イギリスが「栄光ある孤立」という外交政策を放棄し、最初に同盟関係――日英同盟（1902）――をむすんだ

日本にたいする儀礼的配慮のためだったのかもしれないが。

IN A TIGHT PLACE..

図6 『パンチ』1904年2月号

図7 Punch's Almanack for 1905

そのような国際関係における日本の立場の変化に応じて、日本論は当然変容していかざるをえなかった。第2期の日本論にあったようなエキゾティシズムも進化論的なオリエンタリズムも、そのままで生き残ることは不可能になったからである。たんにエキゾティシズムのまなざしによって日本を見上げることも、進化論的なオリエンタリズムのまなざしによって日本を見下すことも、不可能になっていた。その意味ではたしかに佐伯氏が述べるように、日本は「リアリストの眼」で観察されるべき対象、リアリスティックな分析を要する対象になってきていたのだろう。

しかし本論では、第3期以降の日本論において、どのようなかたちでリアリズムが展開していったか、あるいは、第3期以降のリアリズムがたとえばオールコックのそれとはどのように異なるものであったか、という方向に議論を進めることはしない。ここではいったん第2期にもどり、イデオロギー（世界観、歴史観）としての進化論が、第2期のローウェルの『極東の魂』のなかでどのように機能しているかをながめる。そのうえで第3期のギューリックの『日本人の進化』と、さらにベネディクトの『菊と刀』とをあつかうことで、進化論が日本論の展開のなかで果たしたイデオロギー的機能がどのように変化していったのかということを問題にしてみたいと思う。

パーシヴァル・ローウェル

上記の分類によれば、パーシヴァル・ローウェルは、エキゾティシズムを当時の日本に求めてやってきた第2期の人びとに属する。彼は1855年にアメリカのボストンに生まれた。ローウェル家は知的名門の家系であり、大学の総長や政治学者、実業家、詩人など、数多くの多彩な人物を輩出している（詩人のエイミ・ローウェルは彼の妹である）。ローウェルは、1876年にハーヴァード大学を卒業すると翌1877年（明治10年）に来日し、その後十数年にわたって日本に滞在した。その間、能登や伊勢神宮を訪れ、御嶽山では修験者の生活を調べて著作にまとめ、出版している。

22歳で日本へやって来たローウェルは11年後の1888年に『極東の魂』という日本論を書く。その内容は、ラフカディオ・ハーンがこれを読んで来日を決意したというほどに興味深く、読み物としてもおもしろいものであるが、日本をながめる彼のまなざしを特徴づけていたものは、たしかに第2期の日本論の特徴であったエキゾティシズムと進化論だった。彼の進化論は、かならずしもビゴーやロティのそれのようにあからさまなものではなかったのではあるが。

ローウェルのエキゾティシズムは、彼がはじめて上陸したときの日本の印象を以下のように書いているところにあらわれているだろう。

> The boyish belief that on the other side of our globe all things are of necessity upside down is startlingly brought back to the man when he first sets foot at Yokohama. If his initial glance does not, to be sure, disclose the natives in the every-day feat of standing calmly on their heads, an attitude which his youthful imagination conceived to be a necessary consequence of their geographical position, it does at least reveal them looking at the world as if from the standpoint of that eccentric posture. For they seem to him to see everything topsy-turvy. Whether it be that their antipodal situation has affected their brains, or whether it is the mind of the observer himself that has hitherto been wrong in undertaking to rectify the inverted pictures presented by his retina, the result, at all events, is undeniable. (Lowell 1-2)

「地球の反対側にいる」日本人と西洋人では、ものの見方なり世界のながめ方がまったく逆さまであるというローウェルだが、しかし彼は、日本の文明と文化が野蛮で、西洋のそれよりまったく劣っているとは言っていない。むしろ彼は、「日本の文明は、野蛮でないという意味においてはわれわれの文明と対等である」(Lowell 6) とも、「知性の頂上はさほどそびえ立ってはいないとしても、全体に広がる高原はかなりの水準である」(Lowell 6) とも言っているのだ。

> Only half civilized the Far East presumably is, but it is so rather in an absolute than a relative sense; in the sense of what might have been, not of what is. It is so as compared, not with us, but with the eventual possibilities of humanity. As yet, neither system, Western nor Eastern, is perfect enough to serve in all things as standard for the other. (Lowell 6)

たしかに極東は「半分しか文明化していない」とローウェルは述べている。またべつの箇所では「半文明 (semi-civilization)」(Lowell 5) という言葉もつかっている。しかし彼は、大部分の彼の同時代人がしていたように、当時の欧米を文明とし、その対比のなかで東洋を「半文明」、あるいは不完全な遅れた文明としているわけではない。人類の文明の進歩を「ありうべき理想の形」「人間の窮極の可能性」にむけての運動ととらえ、そのような文明の最終地点との比較のうえで「半文明」と呼んでいるだけなのである。したがって彼にしてみれば、東洋の文明も西洋の文明もどちらもそこに至るまでの途上にあるのであって、東洋が「半文明」であれば、西洋もまた「半文明」であるにすぎない。

これは同時代の社会進化論的立場とはかなり異質だろう。進化という概念を人種に適用し、世界中のあらゆる人種をひとつの進化論的尺度のうえに配列し、人種の序列化を強化しつつあった社会進化論は、尺度の頂点に西欧の白人種を置き、アジアの黄色人種、アフリカの黒人種をその下位に、ただし猿の上位に、位置づけていた。そして進化主義的人類学は、野蛮から未開へ、そして文明へといたる文明化の普遍的尺度によって、世界中の民族を分類しようとしていた(「野蛮」「未開」「文明」の3段階発展説を主張した進化主義的人類学の代表作、タイラーの『原始文化』は1871年に出版されていた)。

そのような同時代の状況のなかで、東洋の文明も西洋の文明もともに「半文明」としたローウェルは大いに特異な存在だったように見える。もちろん彼も、人類の歴史がひとつの普遍的な尺度にそって野蛮から文明へ動いているという進化主義的人類学の歴史観・文明観からは自由ではなかったのではあるが。

進化論的オリエンタリズム

しかしローウェルが東洋も西洋もともに「半文明」と見なすことで、東洋を進歩の停滞と見なす進化論的オリエンタリズムからほんとうに自由であったかというと、じつはかなり疑わしい。なぜなら彼は、日本の文明が、というよりも極東の国々の文明が、「半文明」の状態から「ありうべき理想の形」としての「人間の窮極の可能性」へと移行している途上にあるとは考えておらず、その文明が「進化の過程を完全に終了した」と診断しているからである。

> In the civilization of Japan we have presented to us a most interesting case of partially arrested development; or, to speak esoterically, we find ourselves placed face to face with a singular example of a completed race-life. For though from our standpoint the evolution of these people seems suddenly to have come to an end in mid-career, looked at more intimately it shows all the signs of having fully run its course. Development ceased, not because of outward obstruction, but from purely intrinsic inability to go on. The intellectual machine was not shattered; it simply ran down. (Lowell 8)

> For their [China, Korea, and Japan's] vital force had spent itself more than a millennium ago. Already, then, their civilization had in its deeper developments attained its stature, and has simply been perfecting itself since. (Lowell 9-10)

ここでローウェルは、日本の文明を「部分的な発育停止のひじょうに興味深い事例」、「民族としての生命を完了した特異な事例」であると定義し、日本人が「進化が道なかばで突然停止したように見えるが、より詳しくながめるならば、進化の過程を完了したあらゆる徴候を示している」と述べ、そのうえで「1000年以上まえに生命力をつかいはたした[極東]の文明」は成長の段階を終え、すでに「仕上げ」の段階に入っているのだ、と結論づけている。

ひとつの人種ないし種族の発展と生物個体の成長と老化の曲線とのあいだにパラレルな関係を見ようとするローウェルの思考法は、系統発生は個体発生をくりかえすという進化論主義者ヘッケルの反復説との同時代的共震関係と言えるかもしれない。そして彼は、日本の文明がその「生命力」

をうしない老年へといたった理由を、社会組織の弱点にでも、「外部からの妨害」（外国の占領のような）にでもなく、極東（中国、朝鮮、日本）の国民一般に見られる「内在的要因」に帰しているのだ。

その「内在的要因」のひとつをローウェルは「模倣精神」と名づける。彼によれば、日本人（にかぎらず極東の国民）は古来より「思想を輸入する民族」であり（中国はインドから、朝鮮は中国から、日本は中国と朝鮮から）、「自分で真新しい概念を造り出そうとするよりは、他人の出来合いの品を選」(Lowell　11)んできたうえに、それを自分の文化に同化することなく、「まるごと先祖伝来の木に接木し、その結果、もっとも不自然な変種を生じさせ」(Lowell　12)る傾向を示してきた。「模倣精神」による「文化の接木（culture-grafting)」(Lowell　11)の結果、「接木はいつか大きな枝に成長したが、幹は相変わらず若木の状態のままであった。換言すれば、成人しても、幼年時代の精神状態を保ちつづけていた」(Lowell 12)。

言いかえるならば、「人間が手を加えることにより、自然の進化の整然とした過程が台なしにされた」(Lowell　11）のである。そしてそのことを、ローウェルはダーウィニズムの「適者生存」をもじって、「不適者生存（the survival of the unfittest)」(Lowell 8）と呼んでもいる。

日本の進化に停滞をもたらしたもうひとつの、そしておそらくもっとも重要な「内在的要因」は個人性の欠如、すなわち「極東の魂」とも言うべき「非個人性(impersonality)」である。ローウェルによれば、「温帯の幅の半分以下の間隔をもつふたつの等温線に挟まれた地域」(Lowell　14）には古今のほとんどすべての主要な国がふくまれているが、「この領域に住む人びとは、西に向かうにつれていっそう個人的になる」(Lowell 15)という。

> So unmistakable is this gradation of spirit, that one is tempted to ascribe it to cosmic rather than to human causes. It is as marked as the change in color of the human complexion observable along any meridian, which ranges from black at the equator to blonde toward the pole. In like manner, the sense of self grows more intense as we follow in the wake of the setting sun, and fades steadily as we advance into the dawn. America, Europe, the Levant, India, Japan, each is less personal than the one before. (Lowell 15)

「人間の皮膚の色は、赤道付近の黒から、極地に近づくにつれ、金髪色白に変化していく」が、それと同じように　「アメリカ、ヨーロッパ、レヴァント、インド、日本と」、西から東に進むにつれて、個人性は薄れ、「非個人性」が増していく、とローウェルは述べる。東にむかうにつれて、列車がパンクチュアルでなくなっていくことを嘆いたのは、『ドラキュラ』のなかのジョナサン・ハーカーだったが、このローウェルの言葉にはそれと同じくらいの露骨なオリエンタリズムがあると言えるだろう。

というのは、彼は、西洋の個人性と東洋の「非個人性」をたんにふたつの文明のタイプとして呈示しているわけではなく、そこに圧倒的な価値の差を認めているからである――「個性的、進歩的な西洋がまちがいで、非個性的、無感情的東洋が正しいということがありうるだろうか。まさかそんなことはあるまい」(Lowell 24)。

そしてローウェルはふたたび人生の比喩――人種の発展と個人の人生との比較――をもちだす。人生において「個人の意識」は、「ふたつの一見非個性的状態によって」前後をはさまれている。

> Bounded by two seemingly impersonal states is the personal consciousness of which he is made aware: the one the infantile existence that precedes his boyish discovery, the other the gloom that grows with years,—two twilights that fringe the two borders of his day. But with the Far Oriental, life is all twilight. (Lowell 24)

「非個人性」という「薄明」から個人性という「昼」へ、そしてふたたび「非個人性」という「薄明」へ、というのが西洋人の人生だとすると、東洋人の人生は「いつも薄明なのだ」と、ここでローウェルは述べている。

そしてもしも「非個性的状態」が西洋人の幼年期と老年期のものだとすれば、ローウェルにとって問題なのは、「極東の魂」の「非個人性」がはたして幼年期のものなのか、それとも老年期のものなのかということである。というのは、もしも後者であるとするならば、東洋は西洋よりも進化の進んだ存在ということになってしまうからだ。しかしもちろん彼は、そのようなことを認めない。彼は、極東の「非個人性」とは、幼年期がそのまま残ったたものにすぎず、「極東の人びとは、われわれ［西洋人］が出発した地点からあまり遠くないところで停滞してしまった」とはっきりと言明しているからである。

> . . . these people are now, at any rate, stationary not very far from the point at which we all set out. They are still in that childish state of development before self-consciousness has spoiled the sweet simplicity of nature. An impersonal race seems never to have fully grown up. (Lowell 25)

さきにわれわれは、ローウェルが東洋と西洋をともに「半文明」であるとし、「日本の文明は、野蛮でないという意味においてはわれわれの文明と対等である」と述べるのを見た。しかしそれは、彼が同時代のイデオロギーであったオリエンタリズム的進化論から自由であることを意味しているわけではなかったのだ。

たしかに西洋の文明もいまだ未完成なものではあるが、少なくともそれは「ありうべき理想の形」にむかって動いている。それにたいして東洋の文明は、たとえ「仕上げ」の段階にはいっていると見える部分があるとしても、それは「模倣精神」によって人為的に接木された枝の部分であって、もともとの幹の部分は、西洋が「出発した地点からあまり遠くないところに停滞」(Lowell 25)し、幼児期の特徴である「非個人性」を保っている。

たしかにローウェルは、エキゾティシズムに誘われて日本を訪れたはずである。そのことに間違いはない。そしてエキゾティシズムに魅惑された眼で、老年期の成熟とも解釈しうる「非個人」的な「極東の魂」を見て、「仕上げ」段階にあるかに見える日本の文明のいくつかの側面に心ひかれたこともあっただろう。

しかし彼は最終的には、「極東の魂」の「非個人性」を幼児期の特質と断定することによって、そして「仕上げ」段階にまで達した日本の文明の側面を、「模倣精神」が可能にした「接木」と解釈することによって、進歩しつづける西洋にたいして、幼児期に停滞する東洋という、同時代のオリエンタリズム的ステレオタイプへと落ちこんでいったのである。

このように、『極東の魂』は、ローウェルのエキゾティシズムが、同時代に支配的だった進化論的

オリエンタリズムのイデオロギーのなかへと回収された経緯を刻印しているテクストとして読むことができるだろう。そして彼の日本論にたいする反論は、『極東の魂』が上梓されたその年に来日したシドニー・L・ギューリックの日本論によってなされることになる。そしてそれもまた「進化」をキーワードにした著作だった。

（次号につづく）

本論文は、平成14年度夏学期に横浜国立大学で開講された総合領域「日本の写像」の１回分として用意した原稿を、論文用に書きなおしたものである。第１部「エキゾティシズムと進化論」と第２部「進化論から文化相対論へ」からなるが、紙数の関係で今号では第１部のみの掲載とし、第２部については次号の掲載とする。

引用文献

Alock, Sir Rutherford, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 1863（ラザフォード・オールコック、山口光朔訳『大君の都　幕末日本滞在記』［上、中、下］、岩波書店、1960 年）

Benedict, Ruth, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, 1946; Boston: Houghton Mifflin Company, 1989

Gulick, Sidney L., *Evolution of the Japanese: Social and Psychic*, New York, Fleming H. Revell Company, 1903

Loti, Pierre, *Japoneries d'automne*, 1889（ピエール・ロチ、村上菊一郎・吉永清訳『秋の日本』、角川書店、1990）

Lowell, Percival, *The Soul of the Far East*, New York: The Macmillan Company, 1911

Satow, Ernest Mason, *A Diplomat in Japan*, 1921　（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』［上、下］、岩波書店、2001 年）

佐伯彰一『アメリカ人の日本論』、研究社、1975 年

清水勲『ビゴーが見た日本人』、講談社、2001 年

三浦篤「フランス・1890 年以前　絵画と工芸の革新」、ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』、思文閣出版、2000 年、26-50 頁

湯本豪一「『パンチ』の中の日本　描かれた日本観」、小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』第七巻、柏書房、1996 年、123-37 頁